

* ネパールでみた“Yodakubo” N (南部) マークのカバンで通うネパールの学生

上田市・長和町
中学校組合立 依田窪南部中学校

やまびこだより No.127 (2013年度) より



ネパールの小学校

南部中のカバンを
背負って
登校しています。

●ネパールと日本の違い●

国名	ネパール	日本
総人口	2,460万人	1億2,750万人
1人当りの 国民総所得	230ドル	33,550ドル
乳幼児死亡率 (対1,000人)	66人	3人
妊産婦死亡率 (対10,000人)	740人	10人
15歳以上 人口の識字率	42%	—

出典：ユニセフ「世界子ども白書 2004」

依田窪南部中学校ではボランティア委員会の活動として、2001年からネパールの学校へ通学カバンを送っています。現地へはJAITI (公益財団法人日本農業研修場協力団) を通じて送っていただいています。箱に詰めて送ると輸送費がかかるため、現地に行く際に手荷物として持って行っていただいています。私たちのカバンはレカリ・バシファント学校に届きます。ネパールの首都カトマ

ンズの南西、車で3時間半ほどのところで、標高は2,350 m。学校が集落から離れたところにあり、通学には遠いところで片道2時間半もかけて歩いて通っている生徒もいるそうです。筆記用具などの学用品も十分でなく、カバンの代わりに布を使っています。現地の様子を撮影した写真には「N」のマークのカバンが映っていました。私たちにとっては不要になったカバンですが、現

地の皆さんが長距離の通学で大切にしてくれている様子を見ると、とても嬉しいのです。同時に私たちは、まだまだ使えるものを捨てていたり、まだ十分使えるのに新しいものを買ったりしていることに気付かされました。今後もこの活動を通して、ネパールの現状を知り、活動の意義を学んでいきたいです。

* 被災地でのボランティア活動に参加 「行ってみなけりゃわからない！」気仙沼向洋高校との交流

長野県 長野工業高等学校

高校生ボランティア新聞 Vol.6 (2012年度) より



現地に行けば、
誰でもできることは
山ほどあります。



悲惨だと思っていたけれど、
みなさんが親切で、とても
あたたかな空間でした。

※「長工祭」でのチャリティーバザーやPTAによる東北物産展の収益金なども支援金に充てました。「長工祭」ではボランティア活動の報告、「はまセン」代表の川上哲也さんの講演会を開催し、地域の方々への情報発信もできました。

被災者の方々、
ボランティアの仲間、
人との出会いが
素晴らしかったです！

つらい状況だからこそ
笑顔が大事なんだね！

東日本大震災に際して、生徒会では4月から校内で募金活動を継続してきました。そして、栄村や東北の被災地でボランティア活動をした近藤正先生の話を知り、生徒たちからは「自分も行きたい」という声が多くあがりました。そこで5月に生徒会の代表6名が近藤先生と共に、宮城県気仙沼市小泉浜地区へ足を運び、ボランティア活動に参加しました。避難所となっている体育館やテントに

宿泊し、がれきの除去に取り組んだり、地元の子ともたちと遊んだりしました。活動を通じて、津波で校舎が全壊する大きな被害を受けた気仙沼向洋高校の存在を知り、同じ高校生として支援することを決めました。そして、生徒会の備品が流されて困っていることを知り、13万円あまり集まった募金で、ノートパソコン1台、プリンター1台を贈ることになりました。

8月にそれらを現地に届けて、生徒会活動などの交流も行い、今後も交流を継続することを約束しました。また、夏休みには野球部の3年生が長野吉田高校の生徒と共に気仙沼市大島での復興ボランティア活動に参加。その際、向洋高校野球部を訪ね、激励の練習球2ダースを贈りました。

* 私たちだからこそできること 僕たちの「元気」が復興の力になる！

やまびこだより No.122 (2012年度) より



長野県北部地震で被災した
栄村(2011年3月)

2011年3月12日、長野県北部地震を体験した栄小学校の児童たち。被災地支援にも感謝しながら、自分たちもなにかできることをしていこうと、総合的な学習の時間で「震災・復興」をテーマに学んでいます。その中で、自分たちの元気が村の人たちを勇気づけることを知り、活動を始めました。



今はみんなで力を合わせ、
復興への道を歩んでいます！

1 たくさんの支援に感謝して

被災をして大変だけれど、ご支援にも感謝しながら、自分たちもなにかできることはないか、話し合いました。



「結い」を訪問



仮設住宅へそうきんをお届け

2 ボランティアのみなさんと

「栄村復興支援機構「結い」」を訪ね、学生のボランティアさんと仮設住宅に支援物資の手作りそうきんをお届けのお手伝いも始めました。



知り合いも少なくても
さびしいかも…。

3 仮設住宅を訪問

そうきんを配りながら、困っていることや小学生にも何か手伝えることはないか、みなさんにお聞きしました。

4 お話を聞く

どんなことに
困っているのかな？

「買い物に不便なので、近くにお店があるといい」「子どもたちの声が聞こえるだけで元気が出る」といった声も寄せられました。

5 みんなで考える

どうしたら喜んでもらえるかな？

お聞きした様子などをもとに、仮設住宅の人たちのために自分たちにできそうなことを考えました。

- 畑の水やり ● 冬場の雪かき
- 話し相手 ● 募金
- お守りづくり

6 楽しい交流イベントを開催しよう

仮設住宅や地域の方々が互いに交流し合えるイベントを開くことに決定。高齢者の方にも楽しんでもらえるプログラムをみんなで考え、計画を立てました。

手作りのお守りに願いを込めて…… 交流イベント第2弾も開きます！



7 絆を深めるために……

交流イベントで仲良くなったみなさんに、今度は私たち手作りのお守りを届けました。栄村の復興に向けて、これからもお互いがんばりましょう！

交流イベント 開催！

楽しみに
してたよ。

来て下さいね。



開催のご案内

当日プログラム

- お茶会
- ゲートボール
- 歌
- ダンス など

● 栄小学校では、支援していただいた方々への御礼の手紙書きや、福島県南相馬市の小学校に「お互いがんばりましょう」といった応援メッセージを送るなどの活動もしています。

＊絆音楽祭で村の人を元気に！

長野県北部地震で被災した栄村で

やまびこだより No.123 (2012年度)より

長野県北部地震で被災。
みんなが支え合っていることを知りました。



震災直後の栄中学校。ランチルームは避難所にもなりました。



絆の大切さを学校祭で表現しようと、地域の方々と一緒に作った「絆RIBBON」の壁画。メッセージを書いた1枚の紙を集めてひとつの絵にしました。



たくさんの人が支えてくれた

2011年3月12日未明、栄村は震度6強の揺れに襲われました。栄中学校も含め、あちこちで大きな被害が出て、村の人たちはしばらく家に帰れなくなってしまいました。中学校のランチルームは地域の避難所になりました。

地震以来、村の大人たちは、炊き出しをしたり、トイレをきれいに保つてくれたり、助け合っているのが安心できるようにしていました。消防団の人たちは夜も村を回って、警備をしていました。村外からは、ボランティアの方が訪れて、気持ちいい足湯なども用意してくれました。県内各地の中学校からは、あたたかいメッセージや心のこもった義援金もいただきました。

つらい経験の中で、そうした人と人と

のつながりが心から嬉しく感じられました。そして、支えてもらえばかりでなく、村の人たちのために自分たちにもできることはないだろうかと思うようになりました。

中学生が村の人のためにできること

でも、中学生にもできることって、なんだろう？ まず、栄村の復興ボランティアの拠点となっていた「栄村復興支援機構『結い』」を訪ねました。そこで聞いたのは、もう村には住めないと思っていたお年寄りが、ボランティアの人に元気づけられて、やはりここで暮らしていることと決めた、というお話。自分たち中学生にも、村の人を元気にすることなら

そこで、栄中学校が得意な「合唱」

で村の人を元気にしよう！と思いつきました。「栄村の力になりたい」とメッセージを送ってくれている他の学校にも声をかければ、もっとみんなが元気になる。力になりたいという各地の中学校のみんなの思いにも応えられる。そこで、県内5つの中学校合同で「絆音楽祭」を開催しました。

村の人が感動してくれたことが何より嬉しかったこの「絆音楽祭」を、これからも続けていきたいと思っています。私たちの村は、みんなが助け合って生きていく村。「絆」が生きている村だということ、そして、どんな時でも、自分たちにできることはあるんだということを、強く実感しています。

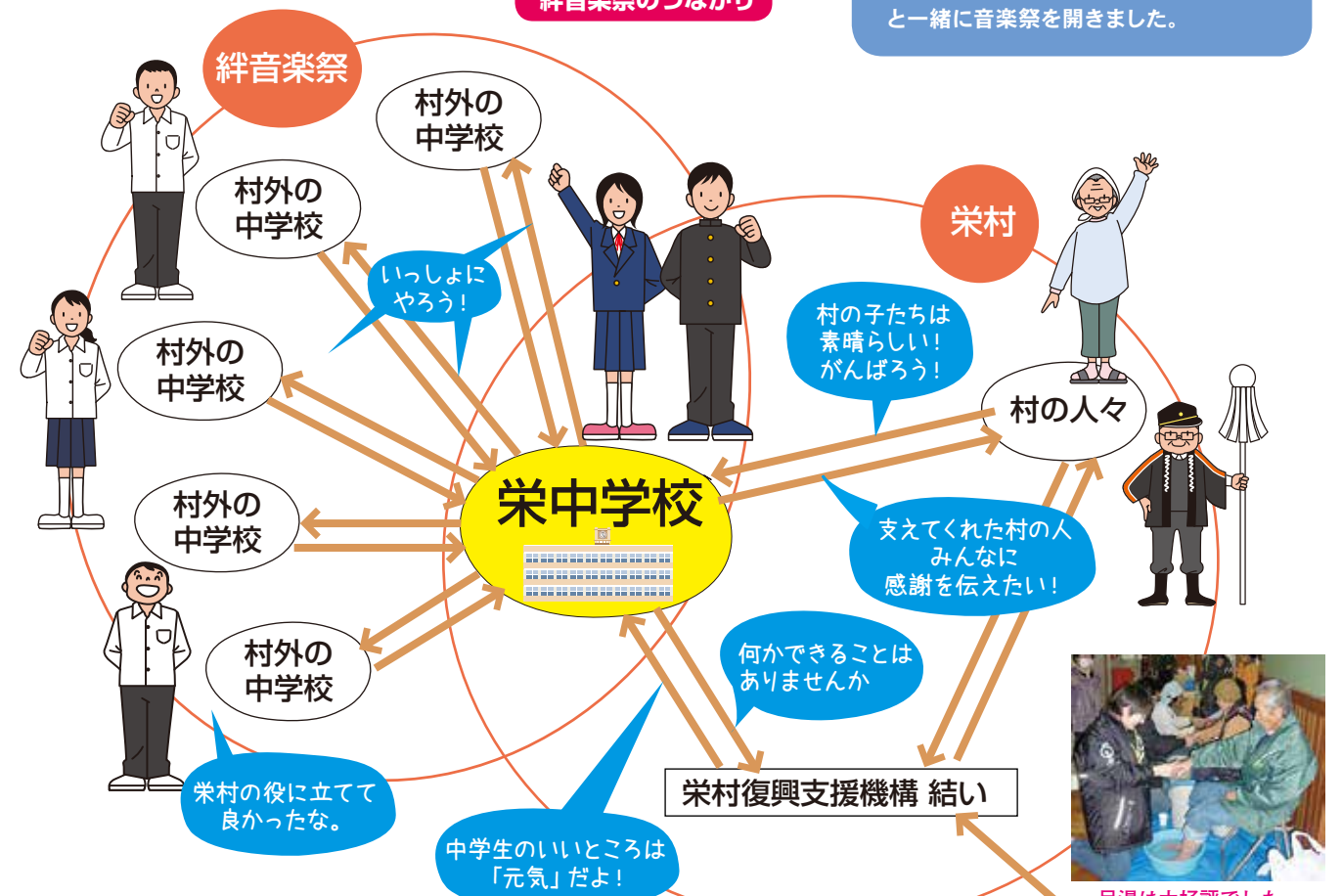
音楽祭の様子は、NHK「中学生日記」でも取り上げられました(2011年11月25日に放送)。



絆音楽祭には県内5つの中学校が参加。



励ましのメッセージがたくさん届きました。



絆音楽祭での交流会

●栄中学校 田中新一先生より

絆 音楽祭が終わるときに、生徒が「地域の方々に喜んでもらって本当によかった」と言いました。村の人々からは、「感動で涙が出そう。栄中の演奏が一番だったよ」と言っていました。大人たちが村のために働く姿を見て、中学生にもできることはないかと真剣に考えて実行した音楽祭。様々な人の温かさ、つながりあう喜び、そして、自分たちにもできることがあるんだということを、生徒たちは身を持って実感しています。地震はつらい経験でしたが、生徒たちは一回り大きく成長しました。たくさんのご支援をいただいたことに、心から感謝します。

*2012年1月26日「福祉教育のついで」事例発表より



足湯は大好評でした。

復興支援ボランティア

* 豊間中学校との笑顔の交流

いわき市の中学生と、手をつなごう

やまびこだより No.123 (2012年度)より



豊間中から記念の旗、相森中からは双子のモザイクアートを交換。

被災地を訪ねた先生の報告で、校舎が無くても仲間とともにがんばっている豊間中学校の生徒たちを知り、「自分たちにできる支援を」と、様々な活動を行う相森中学校。2012年夏、親善交流使節団を結成し、生徒たちの訪問が叶いました。



グループに分かれ、ゲームやトークで楽しい交流時間を過ごしました。

あの震災を忘れずに…… 私たちの方が元気をもらいました

須坂市立相森中学校では、2011年の東日本大震災で被害を受けた福島県いわき市立豊間中学校に応援ビデオレターを送るなどの交流活動が続けてきました。私たちは「今年も何かできないか」と考え、先生やPTAの方々の協力で、8月に親善交流使節団を結成して被災地を訪問し、豊間の方々に会いに行ってきました。

緊張する私たちを笑顔で温かく迎えてくださった豊間中学校の皆さんとは楽しく交流ができ、みんなで困難を乗り越えようとしてい

る団結の強さ、心の優しさが伝わってきて、私たちの方が元気をもらった気がします。

震災を忘れないためにも、この交流を通して学んだことをみんなにも伝え、今後どのようなことができるか考えていきたいと思います。

●引率した相森中学校 月岡英明先生より

被災地支援のあり方は多様ですが、笑顔や友情を届け、絆を深める交流の有効性を今回強く感じました。「支援する」と言うより、「手をつなぎ、被災地から学ぶ」というスタンスが大事です。お互いの生徒たちがこれからの復興の力となる日が来ることを願ってやみません。

被災現場を視察……ショックでした



親善交流使節団に参加した生徒の感想より

- 現地に行ってみなければ、被害の実態や被災者の思いを本当に肌で感じ、理解することは難しいんだと学びました。
- みなさん笑顔で迎えてくれたけれど、自分が思っていた以上に悲しい思いを抱えていることが分かりました。
- 被災現場は残酷の一言。被害の規模が想像以上に大きすぎて言葉が出なかった。



いまだ放置されたままの震災がれき

- 豊間の人たちが辛い経験を乗り越えてくることができたのは、仲間との絆があったからだと思いました。
- 被災地の人々が今最も怖いのは「忘れられること」だそうです。このつながりを大切に、自分が見て聴いて感じたことを多くの人に伝えていきたい。大震災はまだ終わっていないのです。

* きささげ夢プロジェクト

南三陸町訪問から私の生き方も考えた

やまびこだより No.135 (2014年度)より



●ボランティアチームによる
ハンドマッサージ
「手のぬくもりが嬉しいんだよ」



●仮設住宅で吹奏楽部の演奏



●バスケットボール部の
交流試合ではエールを交換



きささげ夢プロジェクト

全校生徒73名の聖南中学校では、2012年度から「きささげ夢プロジェクト被災地訪問」という、宮城県南三陸町の皆さんとの交流を行っています。

「きささげ夢プロジェクト」は、小さい学校だから、みんなで大きな夢を持つ、というプロジェクトで、被災地訪問や全校合唱など、全校で様々なことに取り組んでいます。

被災地訪問は2014年で3年目です。在学中に、全員南三陸へ行こうという目標を持っています。今年は10月11日

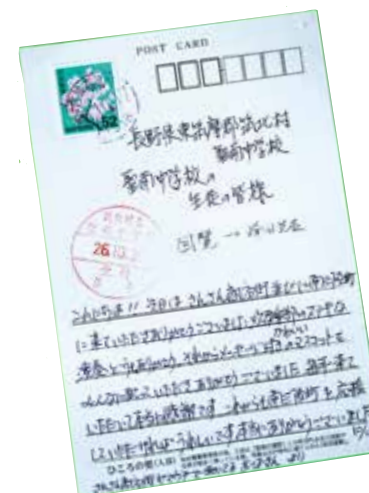
～12日に、吹奏楽部、男子バスケットボール部と、有志ボランティアチームの合計43名が訪問しました。

仮設住宅や商店街での演奏会、志津川、歌津中学校とのバスケットボール交流試合、町の人々へのハンドマッサージなどのボランティア活動を通し、南三陸の皆さんの思いに触れ、自分たちの毎日を振り返ることもできました。

復興には、まだ長い時間がかかります。南三陸で出会った人々のこと、皆さんの温かい心を忘れずに、一生懸命生きていくことが、復興支援だと強く感じました。



●南三陸町の高野会館



さんさん商店街の方から
頂いたお礼の葉書

★ 参加した生徒の感想より ★

- 「私は今まで、自分は人のために役に立ったことがあまりないような気がしました。ハンドマッサージをしている時、あるおばあさんから、『私はあなたたちのおかげで元気になれるし、長生きしてるんだよ』と言われました。こんな私にも人の役に立てるのかなと思え、とてもうれしくて仕方がありませんでした」



●南三陸町の朝焼け 多くの命も奪ったけれど、豊かな恵みも与えてくれる、美しい海です。

- 「南三陸町の皆さんは、つらい状況の中でありながら、一生懸命に生きていました。南三陸では、結ぶという字を使って『結いっこ』と呼ぶそうです。人と人とを結び結いっこは、この筑北村でもたくさんあるような気がしました」

- 「南三陸のすべての方から、あたたかいぬくもりを感じました。今回一番考えたことは、自分はなぜこのぬくもりを大切にできなかったか、ということです。人としてのぬくもりを忘れない人々を見ると、自分自身が人としてまったくかわらないと思いました」

* 私たちは未来の設計者

被災地 岩手県大槌町での交流をとおして



やまびこだより No.128,131 (2013年度)より

軽井沢町の小中学生を代表して 大槌町を訪ねました



東日本大震災で大きな被害を受けた大槌町

復興支援バスツアーに参加して

軽井沢町の小中学生を代表して、町内3つの小学校の正副児童会長たちが、町社会福祉協議会主催の「復興支援バスツアー」に参加しました。

夏に学校で講演してくださった大槌中学校の鈴木校長先生のお話を聞いた小中学生が集まり、「私たちにできることは何だろう?」と話し合いました。

今回参加した7名は軽井沢町にいる小中学生の「現地の様子や、そこにい



大槌小学校の皆さんと津波の避難訓練

る人を知りたい、つながりたい!」という気持ちを届けながら、大槌小学校の皆さんと一緒に津波の避難訓練にも参加しました。参加した友達の報告をもとに、これから小中学生がみんなで協力して支援をしていきます。



★ 参加した児童の感想より ★

● 私たちに「何ができるか」と聞きました。それは「大槌の事を忘れないでほしい」との事でした。なので私は、大槌だけでなく、震災で被害を受けた地域を忘れずに日々を過ごして行きたいです。

● 皆さんが元気に過ごしている姿を見ることができて、とてもホッとしました。津波や地震に負けずに、いろいろな場面に真正面から向き合ったからこそ、今の白沢さんや小学生がいると思います。



大槌町

死者・行方不明者数1,282名。全壊、半壊した家屋は3,717棟。今も、470名を超える人が行方不明のままです。

大槌中学校は、全校生徒267名中、被災生徒は181名に上り、半数に近い127名が家を失い、仮設住宅から通学し、ほとんどの生徒が身内か知人を失っています。

負の体験は消えない...
それならみんなで
楽しい思い出を!

毎日笑顔で登校

数々の支援が生徒たちの笑顔を支えています

生徒たちの元気の源は、くつやカバン、義援金など全国から寄せられた温かい支援、そして、みんなで楽しいことをしていこうという前向きな考え方だと思います。支援者とのふれあいはじめ、震災を機に体験した多くのことが、彼らの発想を変え、心を培い、そして未来を変える。子どもたちは未来の設計者なのです。

軽井沢町・長野市・松川村で開かれた大槌中学校校長 鈴木利典先生の講演会より

仮設校舎に感謝を
込めて掃除しています。



鈴木利典 先生

笑顔を保つ元気な大槌中生

大きな被害を受けた大槌町ですが、そこで生活する大槌中学校の生徒は、とにかく元気です。朝から下校するまで、廊下ですれ違う度に、1日に何度も笑顔で挨拶が飛び交います。部活動でも団体優勝8種目という大きな成果を残しています。

* 福島の人たちに思いを寄せて

エネルギーについて、福島の小学生と話し合い

須坂市立 森上小学校

やまびこだより No.132 (2014年度)より



ほかの県の人と
エネルギーの話が
できてうれしいです。

テレビ電話で話し合い



原子力発電所の
近くにいる
怖くはないですか?

原子力発電所で、事故が起きると、どんな影響があるのでしょうか。

福島県の人たちが事故によってどのような気持ちで過ごしたり、経験をしたかのかを直接聞いてみました。

福島県新地町立駒ヶ嶺小学校の6年生と「未来のエネルギー資源」についてテ

レビ電話で話し合いました。

みんなが使っている電気のことを、発電所のある地域の人たちだけに任せきりにせず、これからも福島の人たちの気持ちに寄り添って考えていきたいと思っています。

駒ヶ嶺小 福島の子どもの話

● 事故の後、地元の食べ物、家の畑のものでも、遠足も中止に検査をしてから食べるようになりました。

森上小 みんなの支援があって今は楽しく暮らせていると聞いて、安心しました。

駒ヶ嶺小 原子力発電については、どう思う?

● どんなに気をつけても、事故が起きる危険性はなくなる。 ● いくつかはなくなってほしい。でもすぐには難しいかもしれない。

福島の人たちも、悩んでいるんだな。

近くに住む人の気持ちを聞いて、ないほうがいいと思いました。

森上小



福島の様子

＊ みんなで育てた りんごで被災地支援 支援活動をしている保護者も協力！

飯田市立 飯田東中学校

やまびこだより No.133 (2014年度) より



シニア大学の方と仮設住宅を訪問

飯田東中学校の環境ボランティア委員会では、長野県シニア大学 31 期生の方々と一緒に、東日本大震災で被害を受けた岩手県陸前高田市の西大隅仮設住宅へ支援を続けています。

昨年 (2013 年) は私たちが育てているりんご並木のりんごやジュース、ジャムと色紙を送りました。今年の 5 月に仮設住宅に訪問させてもらったとき、「おいしかった」「ありがとう」と言ってくださったのが、とても嬉しかったです。

仮設住宅に住む方々が、少しでも勇気が湧いてくるような支援ができるよう、これからもりんごにメッセージを添えて送っていききたいと思います。



こんな支援活動もしています

●市長さんを通して、東日本大震災後に福島南相馬市から飯田市に避難された方々へりんごを送っています。



●被災地支援のために、毎週アルミ缶回収をしています。昨年は 86,080 個集まりました。

＊ たねぷろじえくと 津波の被害を受けた里山をよみがえらせよう！

上田市立 塩田西小学校

やまびこだより No.134 (2014年度) より

津波の被害を受けた宮城県山元町の里山をよみがえらせるために、被災地のドングリから苗木を育てる「たねぷろじえくと」に取り組んでいます。長野大学の皆さんと一緒に、2 年生がドングリの苗木を育てています。

10 月に宮城県山元町を訪ねて、同じ活動をしている山元町立坂元小学校、白石市立第二小学校の皆さんと交流会をしました。

私たちが育てた苗木を 2016 年春に植える予定の場所を見学しました。津波で木



育てているドングリの苗木



宮城県の皆さんが育てている苗木を見せてもらったり、一緒に苗木にするドングリを拾ったりしました。



植樹の予定地



山元町の小学生と交流会

がなくなってしまう、今はまだ砂だらけです。

「早く植えたいな」「たくさん植えよう」とあらためて思いました。

＊ 有志で被災地支援ボランティア活動 現地に行って感じたこと

長野県 白馬高等学校

高校生ボランティア新聞 Vol.7 (2013年度版より)

東日本大震災の悲惨な状況を知って、前年度の生徒会の生徒が自分たちにも何かできることはないだろうかと有志を募り、東北ボランティア活動を開始。今回はそれを引き継ぐ形で、宮城県仙台市若林区での活動に、7 名の有志生徒 (先生と保護者が一人ずつ同行) が参加しました。

現地では『ReRoots』というボランティア団体の活動に参加して、その方々から指示をいただき、田んぼ・畑を掘り返し、がれき、プラスチックやガラス片等のゴミを取り除く作業を行いました。

田畑のゴミの除去作業



田んぼ・畑を掘り返し、がれき、プラスチックやガラス片等のゴミを取り除く作業を行いました。



東日本大震災慰霊之塔

参加者の感想

- 現地に行って、被災地に対する見方が変わった、人ごとではないと思うようになった。
- まだまだ復興が進んでいない印象を受けた。
- このボランティアは、保護者、先生方など様々な人の助けがあってできたことだと思う。

当時のこと、また相手の立場だったらどんな気持ちだったのか想像しました。被災地の方々とふれあいの中で、相手の「力になりたい」、他人事ではないと感じ、相手の立場になって考えるようになりました。

今まで、ボランティアというと、募金活動程度でしたが、今回のように現地に行くことが大切だと思いました。行きたい方がいればぜひ行ってもらいたいです。

＊ 被災地とのメッセージ交換 支援活動をしている保護者も協力！

佐久市立 田口小学校

やまびこだより No.120 (2011年度) より

4 月のはじめ、田口小学校では 5 年生のみんなが、東日本震災で被害を受けた宮城県石巻市の小学校に応援のメッセージをまとめ、石巻市の支援活動をしている保護者の方に届けていただきました。そして 7 月、石巻市立釜小 6 年 1 組の人たちから、「心のこもったメッセージをありがとう」「元気ができました」という感謝の言葉が書かれた壁新聞が届きました。壁新聞にはそのほか、震災前と震災後の学校の様子や、困ったこと、不足しているものなどをくわしく調べた表やグラフも描かれていました。

田口小のみんなは壁新聞を見て、思いが伝わったことをうれしく思いながら、被害の大きさを身近に感じました。今度は、ビデオレターで田口小の様子を伝えたり、歌を送ったりすることも考えています。そして、釜小のみんなと元気に交流を続けていけるといいなと思っています。



石巻市立釜小から届いた壁新聞

田口小学校から送った応援メッセージ。児童のお母さんが被災地へ行ったときに届けてもらいました。



＊ できることをしよう 義援金プロジェクト

東御市立 滋野小学校

やまびこだより No.122 (2012年度) より

滋野小学校では、東日本大震災以来、学校をあげてボランティア活動に取り組んでいます。震災後は、被害の情報にみんな心を痛める毎日でした。そんな中「自分たちにできることはないか」という 4・6 年生の思いから、全校でアルミ缶・びん回収が始まり、その後も募金、クワガタや学級園の野菜販売、書き損じ葉書集めへと活動が広がりました。

家の人や地域の方々の協力で、チャリティーバザーも実施できました。パン屋さんはパンを、農家の方は野菜を、陶芸家の方は作品を、保護者の方は家にある



アルミ缶収集



バザー会場

品物・手作りの小物・古着などをたくさん提供してくださいました。「FMとうみ」でも紹介していただき、お客さんが大勢集まりました。多くの方の善意により、バザーは大盛況。目標を超える売り上げにみんな大喜びでした。

福島県伊達市の友だちとの交流も実現しました。一緒に水泳やスライム作りをして、楽しみました。思いきり遊んだのは久しぶりだったので、みんなとてもうれしそうでした。私たちはこの笑顔ずっと見ていたかったです。

私たちにできることは、これからもまだまだありそうです。

＊ 栄村出身の同級生のために 力になってあげたい！被災地支援

長野県 飯山北高等学校

高校生ボランティア新聞 2012年度版より

長野県北部地震で被災した栄村。飯山北高には栄村から通う仲間も多く、彼らのために何かしてあげたいという思いがみんなにありました。

そこで生徒会を中心に義援金を募るほか、4 月初めに有志がボランティア活動に参加。支援物資の仕分け、震災ゴミの片付けなどを行いました。

避難所には何もなかったことから、本や雑誌などを集めて寄付もしました。

一人ひとりがみんなでやれば、大きな力になれることを実感しました。



仮設住宅の除雪作業が大変です。(2011年12月)



震災ゴミの片付け



生徒会執行部の皆さん

生徒と一緒にボランティアをした方からのメールより

自分が皆さんと同じ年齢だったころに今回のような行動力があつたらうか。被災者の方々や他のボランティアに対しての気遣い、言葉遣いができただろうか。私は当時、今回のような災害があつたとしてもできなかったと思う。本当に大切な時に大切なものを学んでいて、それを発揮できるあなた達がいることに感謝します。

栄村の方々は明るい笑顔で気を遣ってください、私たちが励まされるように胸が熱くなりました。

*北高生徒会では、フラワロードの花植えやまちなかの清掃、イベントなどのお手伝いなど、日頃から地域の人たちと一緒にさまざまな活動を続けています。